

悲嘆は共有できるか Chimamanda Ngozi Adichie の “The Grief of Strangers” を読む

藤田眞弓

はじめに

本発表は、Chimamanda Ngozi Adichie の“The Grief of Strangers” (2004)を対象に、トラウマ理論の観点から「語り」と「悲嘆の共有」の問題を考察するものである。物語は主人公 Chinechelum が恋人 Ikeadi の銃撃事件から9年経った今もそれについて語ることができない状態から始まる。この語りの設定とトラウマとは関連があり、Chinechelum を視点人物とする語りは、彼女の個人的な喪失と悲嘆を超えて、国家的暴力や植民地主義の構造的な記憶と交錯する。

本発表では Chinechelum のトラウマが歴史的・社会的構造の中に位置づけられる「集団的トラウマ」と錯綜していることを分析するにあたり、Jeffery C. Alexander の文化的トラウマ理論と Stef Craps の脱植民地トラウマ理論を、「トラウマ語り」の分析には Dominick LaCapra のトラウマ理論を援用する。

“Connecting”から見えてくる個人・集団のトラウマ

9年前に何があったのかは物語の終盤で初めて明らかにされる。これは作品におけるサスペンス効果のためであろうが、本発表では彼女が「9年間纏わりついている麻痺」(68)により、事件に向き合うこともそれについて語ることもできない状態であることに注目する。LaCapra のトラウマ理論によると“act-out”とはトラウマ主体がトラウマ的出来事から距離がおけず、無意識に過去の出来事を反復したり再演したりしてしまう状態のことであり(21, 142)、“work-through”とはトラウマ主体が叙述行為を通してトラウマ的出来事から距離をおけるようになることである(21-22)。ここでの Chinechelum は9年間時間が止まったままで、その出来事から距離が置けない“act-out”の状態であると解釈できる。

このような Chinechelum に対して一族は“Containment”「封じ込め」と呼ばれる彼女を扱う方法を編み出しており、具体的にそれは Chinechelum が語ることを「真に受けない」ことである。Paul Conti によると「恥」はトラウマからの回復を妨げる最大の「個人的障害」である(63-64)。「恥」を外在化させる有効なアプローチは信頼できる相手に自身の経験を叙述的に言語化することであるが Chinechelum の家族の対応はそれを妨げているのである。

母とおばの言うところの“connecting”とは diaspora Nigerian man、英米をはじめとした西洋の英語圏に移住したナイジェリア人男性との結婚を意味する。Diaspora Nigerians はナイジェリアでは享受出来ない平等や成功を求めて英米に移住する。彼らは成功するため過剰にその国に馴染もうと努力するがその一つが改名である。ここで本作における名前を巡る問題を考察する。Neville Lipton は Chinechelum の名前を間違えた上、その名前の意味が彼女に相応しくないと意見する。名前の問題は、Oxbridge 80代白人男性 Neville がひけらかすアフリカに関する知識、そしてそこから人種の問題へと波紋を広げる。Neville はまるでアフリカの人々よりもアフリカについて理解をしているような態度を取るのだが、このことが、Chinechelum が Ikeadi について語る契機となる。見合い相手の Odin にも名前の問題があり、彼はイボ語の名前を“these people” (79) のために改名している。彼らに改名を促す“these people”とは実体のない人々であり、改名の問題に見られるのは、強要されたわけではない他者の視線の内面化、つまり、ポストコロニアル主体が制度的差別の言説を受け入れざるをえない状態にある、ということである。名前の問題はトラウマ、それも歴史的・社会的構造の中に位置づけられる「集団的トラウマ」の問題と錯綜しているのだ。

母とおばの“connecting”に対する強いこだわりは、植民地的価値観を内面化した共同体の声でもある。Diaspora の環境における同国人同士の結婚は文化的純粋性やアイデンティティの保持が狙いである。英米で成功している diaspora Nigerian man との結婚は経済的戦略結婚だけではなく、欧米主義的価値観という植民地支配の遺物の側面もある。しかしここで留意すべきはこの結婚が単なる西洋崇拝ではないことである。グローバル資本主義の恩恵を享受しながらも文化的自律を保持することがこの結婚の狙いで、これはネオコロニアル状況におけるレジリエンスと解釈することも出来る。英米で成功したナイジェリア人は、植民地支配の歴史が残した経済的不安や政治腐敗というトラウマからナイジェリアを回復させる力、レジリエンスの象徴でもある。このように Chinechelum の一族は、“Containment”や“connecting”に見られる植民地的価値観と家族・文化的言説により、彼女がトラウマと向き合い、それを語ることを妨げているのである。

Ikeadi 銃撃事件の回想から見えてくる個人・集団のトラウマ

物語終盤で Chinechelum が Ikeadi の銃撃事件を語る場面における彼女による事件の回想は暴力の記憶が時間が経過しても反復される典型的なトラウマの現れであるが、これは個人のトラウマであるだけでなく集団的・国家

的トラウマでもある。Ikeadi のことを Neville 相手に話し始めたのは「人種についてであれ、何についてであれ、自分がどうあるべきかを言う権利などない」(78)と伝えることがその目的であったかもしれない、と述べられている。ここに Ikeadi の事件が Chinechelum にもたらした個人の悲劇が集団的なそれと交錯していることが示唆されている。Ikeadi の事件はアメリカに住むアフリカ系黒人男性に向けられた暴力であり、白人男性ならば感じることはない黒人男性の集団的・社会的トラウマの表象である。Ikeadi 事件の語りは二人の先祖の村と絡み合った語りとなっており、この土着の文化の創造的な語りは人種差別という集団的・社会的トラウマを背景にする Ikeadi の事件の語りと絡み合う。Chinechelum の語りは単なる個人的カタルシスではなく「ポストコロニアルな証言」として、制度的暴力を可視化する社会的行為としても機能しているのだ。

彼女の語りの聞き手が Oxbridge の白人男性という異なる文化的背景を持つ人物に設定されていることは、悲嘆が文化的境界を越えて響き合う可能性を示しているように思われる。しかしながら、Chinechelum の語りに対する Neville の反応はテキストにおいて不在であり、彼が彼女の痛みに共感したかどうかは不明である。この「共感の不在」により示唆されているのは、トラウマを語ることが必ずしも他者からの理解や共感、および自身の癒しに繋がるわけではないということではないだろうか。LaCapra はトラウマの“work-through”と“act-out”は、密接に関連したプロセスであり、トラウマ的出来事の語り直しはそれと距離を取りながら生き直す契機となり得るが、完全な癒しとなるわけではないと述べている (22, 144)。Chinechelum は「語るに値しない男」(79)に対して Ikeadi について語ったことに怒りを覚えると同時に「遂に他人に話せたことで気分が良くなった」(79)とも感じている。共感の有無に関わらず、Neville に語ったことにより、Chinechelum のトラウマに支配されない生き直しが始まる。

Neville による共感の不在によって示唆される、トラウマを語ることと共感することの間にある大きな隔たりは、物語の終盤で Chinechelum がラジオで子どもの溺死のニュースを聞いても泣くことができない自分を認識する場面と共鳴する。これまでの Chinechelum は「見知らぬ人の悲嘆を共有する奇妙な能力」(68)を持っていた。Chinechelum の他者の悲嘆への共感の変化をトラウマ理論の観点から解釈する。Chinechelum の他者への過剰な悲嘆の共有は典型的な“act-out”の特徴である。Chinechelum はトラウマ主体にしばしば見られる自己と他者を区別する心理的境界線が崩壊した状態で、他者の悲嘆に巻き込まれていた。しかし Neville に対する語りが“work-through”として機能したことにより、Chinechelum はトラウマの治癒には至らないまでも他者の悲嘆と自分が向き合うべき悲嘆の区別ができるようになっていくと解釈できる。文化的トラウマ理論によると、個人の悲嘆はナラティブにより共同体悲嘆に昇華され、これは更に道徳的普遍主義へ拡張する可能性を持つ (Alexander, *Cultural Trauma and Collective Identity* 1)。しかしながら本作では、Chinechelum が子供の溺死のニュースに涙できないことは、Neville の共感の不在と同様に、この、悲嘆の共感がもたらす道徳的普遍主義に対する懐疑、あるいはその困難を示唆するのではないだろうか。

まとめ

悲嘆は他者へと伝えられた際、完全に共有される訳ではない。この「理解されない悲嘆」こそが、作品タイトル “The Grief of Strangers” の核心である。悲嘆は常に「共有」と「非共有」のはざまに存在し、他者の痛みを完全に所有することは不可能である。しかし、それでも語り続けること、聞き続けることが、他者とともに生きる倫理的実践となるのではないだろうか。本作におけるトラウマの語りは、個人の癒しではなく、他者との不完全な関係を受け入れながら共存するための試みとして理解されるべきである。

移民・難民問題、人種的不正義、制度的暴力など、他者の悲嘆が社会のなかで交錯する今日の状況において、Adichie の作品は「共感の限界」を前提とした新たな連帯の可能性を示しているのではないだろうか。文学を通じて語りの不可能性と必要性を同時に描き出すこの短篇は、トラウマ研究の理論的射程を広げるとともに、他者の悲嘆とともに生きるための倫理的想像力の必要性を私たち訴えかけているのではないか。

主要参考文献

Adichie, Chimamanda Ngozi. “The Grief of Strangers.” *Granta* 88 *Mothers*, 2004, pp.65-81.

Alexander, Jeffrey C. *Trauma: A Social Theory*. Polity, 2012.

—, et al. *Cultural Trauma and Collective Identity*. University of California Press, 2004.

Craps, Stef. *Postcolonial Witnessing: Trauma Out of Bounds*. Palgrave Macmillan, 2015.

LaCapra, Dominick. *Writing History, Writing Trauma*. Johns Hopkins UP, 2001.

コンティ, ポール『トラウマ 誰もが傷ついた心をもっている』田畑あや子訳, かんき出版, 2023.

島田周平, 落合雄彦編『ナイジェリアを知るための 56 章』明石書店, 2015.

ファノン, フランツ『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武, 加藤晴久訳, みすず書房, 1984.

ボナーノ, ジョージ・A『リジリエンス 喪失と悲嘆についての新たな視点』高橋祥友監訳, 金剛出版, 2013.